

懐かしくも哀しい満州の思い出

神奈川県 寺岡 武史

今年、平成十九（二〇〇七）年の秋で満八十歳の傘寿を迎えることになります。官立旅順中学校百周年に向けての三十三期の呼び出しがかかると共に、「平和の礎」の原稿依頼を池田先輩よりいただく。同窓会名簿を見ると、もう半数以上の方が旅立たれている。ある先輩が「自己の言行体験を後進に伝えることは先人の義務だよ」と言われたことと照らし合せて。拙文ながら、真実を書き留めてみようかと思いいちました。

私は、埼玉県川越市で昭和二（一九二七）年に生まれました。本籍地は熊本県玉名市八嘉村寺田です。大正時代の末、父は「笈を負って郷関を出、学もし為ら無くんば……」と、東京齒科医専に進み免許を取得し、八千代母をめぐり、最初の開業地が川越でした。私の兄と二児を設け、安定した

生活だったろうと思いますが。郷里には、日清、日露戦争から台湾征伐まで従軍した第六師団の特務曹長だった祖父三二郎が退役して、多少の文才もあったものか。「今故郷の空は青く、稲穂は黄金色を呈し、たわなに実り」と帰郷を望む切なる便りに心動かされて熊本に帰り、やがて高瀬で開業したものの、当時は第一次大戦後でニューヨークウォール街の株価の大暴落に始まり、浜口首相の金解禁の失政による国内の大不況時代でもありました。そして、人々の心は大陸へと、青雲の志が広がるころ、友人の武田さんの薦めで渡満し、馬賊の横行する時代に東西南北と全満を視察したようです。昭和八年に私が小学校一年生の冬、金ポタンの付いた黒い立派なオーバーを着せられ、父のいる満州へ一家揃って旅立つこととなりました。玄界灘では当時の関釜連絡船は平底船で木の葉のように揺れ、皆激しい船酔いのにびていると、日ごろはやんちゃな兄が甲斐甲斐しく母の面倒を見ていたとか。長い列車の旅で、真っ白な銀色の

雪原や鉄橋を過ぎると下車である。安奉線の橋頭という駅で迎えに来ていた代診の前川の小父さんが、私を抱えて降ろしてくれた。外は寒かったが、屋内にはストーブなるものがあり、暖かだった。ここで母と兄と妹、私の四人に父と代診さんの二人が加わって六人が住むこととなる。

ここ橋頭は人口五千人ぐらいの小邑で、日本人街と中華街に分かれていた。北側は約百三十メートルの大潮山が聳える山脈に囲まれ、南はなだらかな丘が広がり、日露戦後に日本兵によって植えられた松の木の林が群生し、松茸も採れた。美しい桔梗の花が咲き、杏のなる神社山がたたずみ、秋祭りには御神灯や子供の神輿で賑わった。東に一本松と呼ばれる山が広がり、その先に紫色に映える橋頭富士を透見し、西は高い鉄橋のあなたに美しい夕日が沈んだ。山並みの麓を細河が流れ魚も豊富で、一部河を堰き止めて集約し水車小屋となり、線香を造った。

硯石も名産品である。止められた河は湖水のよ

うに広がり、ボートや屋形船が浮かび、夏はテントが増え河水浴場として近隣の避暑客で賑わった。秋は芋掘り大会、冬はスケート大会と続き、日本内地のような楽しい日々であった。昔は馬賊の巢窟だったとも言われるその河には、投網を担いだ河魚の好きな父のお供で釣り籠を持たされて、夜釣りによく行ったものである。この河の上流にある釣魚台と共に、二大景勝地でありました。昭和六、七年ごろより、父はこの安奉線沿いの橋頭と鶏冠山に齒科医院を持ち、安奉線連山関守備隊陸軍病院の嘱託医も兼ねていたようです。

橋頭尋常小学校を卒業するころ、南満の風土病と言われる脾臓が腫れる病気になる、一向にはかばかしく無い病状の経過に伴い、体力が危ぶまれていたが、担任の大石先生の薦めで海の近くへの進学が良いのではと勧められたのが、官立旅順中学校だった。前年、五年生のときの修学旅行は旅順、大連だった。白玉山の表忠塔の上から見た旅順港と、青に乳を流したように美しい曲面をなし

て広がる水平線は真つ青な大空と一つに溶け合つて、今も心に残る風景である。天も海も一つに見える「佐渡が島山」の句を思わせる素晴らしい風光だった。東鷄冠山北保塁戦跡見学には、日露戦争当時この戦闘での生き残りの勇士が案内説明者だった。「明治三十七（一九〇四）年七月、乃木三軍の総攻撃が始まった。全滅から全滅」と説明しつつ、はらはらと涙を流されているのが忘れられない。その旅順である。体の弱い母と、一昼夜かけて南満の橋頭から受駈に來た。大連の豪華な大和ホテルに一泊した。翌朝の支払いを見て、「高いのでしよう」と言ったら、母から「子供はそんなことを言うものではありません」とたしなめられた。試験は学校の一室で行なわれ、口頭試問だった。隣の本鷄湖小学校からは蒲池君も來ていた。共に合格したことを後で知る。学校の校庭は広く海に続いているように見えて、掲示板には海軍兵学校合格、松田某と書かれていたのが印象的だった。

寄宿舎は、大きな鉄筋三階のロシア建ての南寮と赤煉瓦三階建ての北寮とを、二階建ての中寮が結ぶ。北寮の一階六人部屋に入れられ、本箱机が並んだ。母は「ここで勉強するんですよ」と言つて廊下に出た。冷たい光つたコンクリートの廊下に立って、「お母さん駄まで送つて行くよ」と言つたら、「ここでいいのよ」と言つて、別れて行つた。あのひ弱い小柄な母一人で帰れるのかしらと心配だったが、母は母でこんな小さな腕をした我が子を置いて大丈夫かしら、と思つたと後で聞いたが、いつも親子の別れは切ないもののようにある。新しい教科書とノートが支給される。

舎生は約三百五十人、この他に第二、第三寄宿舎がある、五年生から小隊長と分隊長、四年生から班長が出て一、二、三年生は各班に分かれて班員となり、各寮に収まる。

起床は、夏冬問わず午前六時舎前の庭に飛び出し、冬の朝などは雪の降る中で乾布摩擦体操をしたことなどを思い出す。先生が「お前たちの体に

筋金を入れてやる」と言われた言葉が懐かしい。

一年生は約二百人、四クラスに分かれ、私は四組に入り、桜の下でクラスメートの写真撮影。朝の校庭への集合は団体行進が始まる。午前四時間、午後二時間、そしてクラブ活動の日課が始まる。

寄宿舎は午後六時の閉門と夕食である。やがて毎週土曜日になると、検非違使の長とでも言うのか班長の「一年生集まれ」の号令がかかり、軍隊式の説教が始まる。

冬でも夜は温水暖房は止められ室温は零度以下となり、部屋に置いてあるバケツの水がかちんかちんに凍る日もあった。起床・朝礼後、水道水が冷たいので何とはなしに同室全員朝の洗顔をしなかつたら、上級生にばれてしまった、「お前たちは日本人か」と言つて、これ幸いとまた説教をくらった。またあるとき、試験が良くできて教師から答案用紙を返してもらい、早く帰って来たことがある。いつもいじめられる班長が板塀の隣の部屋にいたので、わざと「今日も答案用紙は駄目だ

ったなあ」と聞こえる程度に小声で呟いたら、意地悪先輩が大声で「ようし！ 用紙を持って見せに来い」と怒鳴った。「しめしめ、どんな顔が見られるか」と楽しみにして、いつもは怖い班長の所へいそいそと、いや、いやそうにして班長の部屋の戸をたたいた。「ようし入れ」「一年寺岡入ります」と言つて答案用紙を差し出すと、早速見て、「お前は成績の良い方から見せるのだろう」と皮肉っていたので、次に見せた答案用紙は前日より好成绩だった。黙つて二枚返してくれた。

溜飲がぐんと下がった。そのような異常環境の中で母恋しさなのだろう、机を合わせている向かいの友と、自習時間に勉強しているふりをして手紙のやり取りをして遊んでいると、こっそり見回る分隊長に見つかり、呼び出し説教をくらう。こともあろうに小学校時代から兄との喧嘩でも、負けず嫌いの私が殴られても殴られても「畜生！」という癖が、無意識に出るのに気づかず繰り返していたのだろう。まだ畜生と言うのかと、いつま

でも面白がつてたたかれていたことが哀しく思
出される。

初めての間試験が始まる。成績が良くても悪くても、夏休み帰省の喜びが待っている。勉強の足りない者たちは、消灯後も電灯がついている特別自習室に出掛けた。何十人もが、狂人のように大声をあげて字を書く者や、暗記をする者などで異様な雰囲気である。それもそのはず。一科目五十点、平均点六十点以上なければ仮借無く決まる。卒業後、多数の同級生が落第しているのに驚いたものである。夜寝る前とか朝方起こしてもらいながら、した勉強は暗記力だけは抜群になったようだが、一夜漬けの勉強では、しょせん成績の良いはずはない。一週間にわたる不眠勉強で成績の上からぬ理由が分からず、新聞や雑誌の広告にあった頭の良くなる器械や良くなる薬等注文してみたが、あまり効果もなかったようで、止めてしまった。

ある日、担任の板橋先生から「職員室に来たまえ」と言われて、先生の部屋に入ると、黙って頭

の良くなる薬の広告を渡された。恥ずかしくて、全身の血が引くようだった。

帰省前日、舎監の兎玉先生に挨拶に行ったら、ちよどそこに一年下の級長が二人も挨拶に来ていた。「その靴はいくらしたか」と問われ、「はい四十五円しました」と答えたら「俺の月給よりも高いな、頭も靴のように光らせよ」と言われ、その悔しさはいつまでも残った。

苦あれば楽ありとか試験の成績はどうあろうと、中間試験の後は待ちに待った夏休み、初めての帰省である。だれの顔も喜びと興奮に渦巻いていた。あの優しいお母さんに会えるのだと思えば胸震いするような感激に、一日一日と近づくのが待ち遠しかった。寄宿舎で決まった額で与えられていた小遣い、食べたいお菓子を五週間も我慢して使わず貯めていたお金で、母と妹へお土産を、そして自分には好きなものを買ひ込んだ。また夏休み中の宿題をするためにあれもこれもと教科書を詰めたら、抱えるのがやっとなんて重さになってい

た。帰省の列車に間に合おうと、ホームへ鞆を下
げ息を切らしていると、同じように喜びと楽しさ
に生き生きして小さな鞆を持った先輩が、手伝っ
てやるから急げと言ってくれたのが嬉しかった。

そして、「どうしてこんなに重いのだ」と息せき
切って言われたが、返事ができなかった。上り下
りの列車の交わる周水子駅では、遠距離への生徒
は時速八十キロメートルと言われる世界一早い
「特別特急亜細亜号」に乗った同級生と行き交う
ホームは、旅順中学生たちの歓声で沸き返ってい
た。途中、中継ぎの大連駅に下車。乗車を待つ時
間、駅前の商店街に友人等と散策する。昭和十五
年当時は大連駅前の連鎖会（歓楽街）は、大きな
ショッピングガラス窓を通して晴れやかな商品が
目映いように立ち並び、きらきら輝いていた。故
郷の父母兄弟の顔は、もうすぐそこに微笑んでい
る。

深夜特別自習室で勉強する癖がついたころ、上
級生から日曜早朝の黄金台海水浴場における襦みそぎ

に誘われた。午前五時起床、往復十キロメートル
のアスファルト道路の朝駆けである。春とはいえ
五月の海は水のように冷たく、息せき切って駆け
た汗も冷えて、海水に首まではなかなか浸かれな
い。祝詞のあと砂浜に正座、静観すると、真紅の
太陽が海水を跳ね上げて海軍旗のように四方に広
がり、金色の光を棚引く雲に輝かしていく。一緒
に駈ける先生から、「襦みそぎをして、成績が上がると
良いね」とも言われて、無言で駆けつけた。帰寮する
と、寝ぼけ顔の仲間たちが朝の体操をしていた。

厳しい規律のある生活の中でも水泳部と相撲部
にいたことがあり、そのときの先輩から自宅に招
待され、豪華な持てなしをうけたことなどが忘れ
られない。

旅順戦績の山々は、教練の野外演習でほとんど
踏破した。別荘地帯の美しい家並みに、豊富な果
実や野鳥の群遊や、満ち潮に乗って来る黒鯛の強
い引糸等が懐かしい。

厳しい試験環境の中で、進級会議ではいつも話

題にのぼりながら優しい担任の先生のお蔭で進級してきたが、家庭教師をつけてみたらということになり、旅順高等学校生の中山芳郎さんと知り合いとなる。明るい中山青年に「では、代数の問題を解いてみたまえ」と言われた。私はとっさに「この問題集はこんなにたくさんあるので、一ぺんに解く方法を教えて欲しい」と言ったら、「今の一問が解けなくて、どうして次の問題が解けるか」と反論された。まさにそのことが、私の心の金言に鳴り響いた。なるほど、そうなのだ。それまでは数学も理屈無しの丸暗記だったのが、以来理解する勉強に変わった。

やがて試験結果の日がきた。学校の教室で、担任の板橋先生は答案用紙を見ながら「今度も皆勉強ができておらん」と苦情を言われた。今度は、普段の勉強と一夜漬け式の努力の勉強もしたが、駄目だったのかと諦めかかっていた。「用紙を取りに来い。九十三点山口浩一」と呼ばれた。山口君の父は女学校の先生だからできるのは当たり前

と、クラス全員が納得していた。次に「九十二点寺岡武史」と言われた。はて、不思議なこともあるものよと一瞬空耳かとたじろいでいると、クラス全員の視線が一齐に私に襲いかかってきた。「やはり私か」と夢遊病者のような足取りで用紙をもらうと、九十二点が眩しいように思えた。そのときは、物理も化学の成績も九十五点だった。生徒間で尊敬を集めていた京大出身の数学の粟井先生が「今の三年生で、将来見込みのある生徒は寺岡君ぐらいだろう」と二年生の所で話したらしく、一躍全校にうわさが広がり、秀才として有名になった。それまでは、進級教員会議で平均点ぎりぎりの落ちこぼれ生徒が、理数科では平均九十点以上の成績、やや落ちる国語漢文英語を通して平均八十五点と、クラスで一、二番となったから驚天動地のことであつたらう。友人、先輩、後輩等の私への態度が尊敬に変わり、責任ある立場に立つようになり、誇らしい学生生活と変わった。一、二年のころ優しい担任だった上野（綽名をペリカ

ンと言っていた)先生に、中寮の廊下でお会いした。「将来どちらを受けますか」と問われ、即座に「五高を受けたいと思います」と答えた。「期待してます」とのお言葉をいただき、感激した。

それほどに、自他共に納得できる誇らしい立場に立っていた。すべては順風満帆であった。休暇で郷里に帰省したとき、父より小学校の担任だった大石先生へ見せて来なさいと言われ、恥ずかしいやら誇らしいやらだったが、父の命令とて参上しお見せすると、我がことのように喜んで下さり「小学校のときの成績だけでは当てにならないものですね」と父に言われていたとのことだった。

月に叢雲、花に風、浮世の無情でもあるまいが、とあることからとんでもない事件を起こしてしまった。陸士に合格した尊敬してやまない松村先輩から「代数の頭」という参考書を頂き楽しく勉強していたが、八木君の頼みでその本を貸したが一向に返してくれない。問い質したら、とつくと下級生に返すように渡したとのこと。調べたら、一

学年下のその子は自分の本棚に乗せたまま一カ月にもなるのに返さないでいたとのこと。友人を呼んで一緒に説教したら、顔が腫れて教師にばれてしまい、謹慎をくらった。戦争たけなわで推薦進学重視の時代とあって、暗い汚点となったように思える。

昭和十九年になると大東亜戦争はいよいよ急迫を告げ、関東神宮造営の勤勞奉仕をはじめ、甘井子の鉄鋼場への動員となり、勉学は有名無実の日々となる。そのころ母危篤の電報を受けた。以前私は母の看護で命を取り止めたことがあり、母は看護疲れが原因で他界してしまった。電報をもらったとき、直感でもう駄目だと思ったら、両眼の涙が噴水のように噴き出し止らなかつた。

戦時中の汽車は管制中とて遅く、郷里に着いたのは翌日の日もとっぷり暮れた夕方だった。急ぐ心に近所の人の「駄目だったのよ」の言葉を背に我が家に飛び入ると、父が「今棺を出したところだ。長く置いたので臭いが出てきたから」とのこ

とだった。位牌の前の写真が優しく微笑んでいた。労苦の懸け通しだったと思うと、さらに眼前が曇った。

翌日は、降り止んだ雪の薄氷を踏んで焼き場に行き、母の骨を拾った。もう涙も乾いていた。妹の肩を抱いて、透き通る夜空の星を見つめて母の星を探した。もう母はいないのだと思うと、切ない思いが広がっていった。

戦争は重大な局面となり、勤労動員は土壌子飛行場建設の排水溝掘となる。労働の合間に官立旅順中学校五年生の卒業式が行われ、続いて四年生の卒業式も行われた。

私は、官立旅順医専に進学したが、関東州地区中学校七校の上級進学生約八十五人は、引き続き勤労動員を続行することになった。医専の学生の半数は作業班に、残り半数は炊事班となる。私はその主食係として作業隊本部で、その日その日の各校別の作業人員に見合った食糧の計量配分をしたり、海軍の旅順警備府へ、特殊米の受領に卜

ラックに乗って連絡係の湯沢君たちと飛行場を往復したりしていた。やがて、作業は満人学生に受け継がれて、日本人学生はそれぞれの学校へ帰って行った。

帰校後は、中学時代の厳しいスパルタ教育と違い、初めて個人の人格を尊重した教授の方々の医学講義や人間性に触れ、自覚と誇りを覚えた楽しい時期でもあった。竜河の畔に建つ全寮制の自啓寮で、広島原爆投下に続く八月九日の長崎原爆投下の新聞記事に見入っていると、次の者は本校に行けとの通達があった。防衛召集かなと駆けつけてみると、入ったことのない学長室に通された。

向山学長は、おもむろに「お召しが参りました。宜しくお願ひ致します」と告げて召集令状を渡し、深々と頭を下げられた。赤紙の召集令状である。

全身の血が逆流するような緊張と興奮の中、父に知らせる暇もなく、徒歩三十分かかる寮へ駆け足でとって返すと、身の回りを簡単に整理し、それを上野君（今は亡き友人）引揚げ後元日本大学

助教授)に託して旅順駅に集まると、古い将校服に帯剣した人、民間服の人、学生服の若者と、雑多な服装の人々で興奮のつぼとなっていた。別れを惜しむ人たちの集団が発車を待っている。やがて懐かしい人々を残して発車、応召列車に向けて、「断」と大書の大旗をうち振り、「俺も後から行くぞ」と、踏切で残留組となった友の声と姿が力強く心に残る。

途中、列車の中で突然腹痛と血痰の応召兵の一人が私を訪ねてきた。列車には軍医も衛生兵もおらず、「あなたはお医者者の学校に行っておられるのでしょうか」と相談に来られた。私は「入学したばかりで何も分かりません」と答えたら、悲しそうに痛がっていた。次の停車駅で衛生兵が「急性盲腸炎」と診断し、帰されて行った。そのとき、つくづく「私は医者になつたら、何でも診れる医者になろう」と思った。それが、今日内科一般医として生きている基だったかもしれない。

窓を閉めた列車は二昼夜の後、朝早く東満州の朝陽鎮に着き下車する。部隊では「釜揚げ」と言つて食事運搬係をしていると、陛下の終戦放送を聞いたとうわさが流れてきたが、厳しい憲兵の取り締まりで半信半疑のまま再び乗車し、列車は兵站基地四平街へ反転逆行し、下車となる。映画館に入れられ、すし詰め的人员オーバーだがさらに押し込まれ、入り口で立錐の余地無く動きもままならぬまま、うたた寝の一夜を明かす。兵站基地の広場は、武器は少ないが、軍隊毛布軍服衣類野球の道具といった厚生物資が各所にうず高く積みまれている。「俺も一度は将校の服を着てみよう」と言つて羽織っている古兵たちの姿を見る。中の一人が新しいグローブで真新しい白球を、燃えている機材や書類の中に投げ込んだ姿を見て、やはり日本は負けたのかと思うと、今年の春亡くなつた母への思いと重なつて、急に熱い涙があふれ出て視野が曇ってしまった。

やがて集められた応召兵たちは、部隊長の訓辞

で「日本は精神力では勝ったが、科学に破れた」との言葉を残して解散となった。応召兵たちは、無蓋貨車に材木とアンペラ箆で日除けを造り、配給の軍靴を履き、乾パンと酒の一升を下げて、帰還列車に乗り込み出発する。後で、人ずてに三時間後にソ連軍の進駐があつたと聞く。正に、間一髪でシベリア行きを免れたことになる。過ぎ行く貨車の帰還兵は、土手から手を振る子供を抱えた若妻へ「頑張るんだぞー」の言葉を投げて走り去る。あの親子たちは、その後どうなっただろうか！行く貨車の上から見渡す地平線は雄大で、一点に見える白雲と平原との間に光る銀の糸は、やがて大空を覆い尽くし、真っ暗になった空から篠竹のような大粒の雨が列車に降り注ぐと、見る間に空が白んできて、やがて平原のかなたへ一点の白点となつて地平線に消えていく。大陸の広大さの中に、しばし戦争を忘れさせてくれる風景である。

旅順、大連の分岐点、周水師で下車させられると、戦時中、灯火管制で真っ暗だった駅は煌々と

る電光に輝き、周囲の山々が静寂の中に不気味に広がっている。約一週間ほどは暑い日盛り中しほしの平和が訪れ、友人等と竜河の橋の欄干から水に飛び込み、涼を楽しんでいたが、間もなく国道を絵にあるような赤いソ連旗の大旗をなびかせ、粉塵を巻き上げて疾駆し旅順市街へ走り去るトラックが見えた。と思う間もなく、その傍を平行する鉄道線路に、数十台のスターリン戦車を乗せた貨車が運ばれて行く。コズロフ司令官による旅順の進駐と接収の始まりである。旅順要港部を押しさえ、全員を捕虜として旅順工大に収容し諸機関を閉ざし、高等法院に司令部を置き、九月十六日ごろソ連軍司令部から市長、市役所幹部、高等法院判事、監察官、警察官に全員集合の命令が出され、全員逮捕連行されてどこかに連れ去られてしまったとのこと。

以来、街の治安は乱れる。先のスターリングラード防衛戦で有名をさせた囚人から選ばれた軍人と言われるロコゾフスキー元帥は、その部隊を全

部囚人で編成し、ウオッカを飲み放題に飲ませ、無鉄砲な囚人たちが酒の勢いで猛攻を重ねてスターリンググラードで勝利したと言われ、その軍隊が満州へ送られてきたのである。何年も郷里を離れた兵たちは「ダワイ！ ダワイ！」と略奪、強姦と無法行為を繰り返している。

ある朝やけに外が騒がしいと窓から覗くと、めいめい獲物を持った中国人たちが食糧倉庫を襲って、穀物をそれぞれ運び出し逃げて行った。寮よりの退去も間近いことと、荷物を整理しまとめて小部屋に置いていたところ、「泥棒が入っているぞ」の声に皆で追い出しに駆けつけたが、日本の敗戦で一等国民になった自負心でもあろうか、脅かしても平気で泥棒をしている一人の満人に当惑している、折良く庭に入って来たマンドリン様の自動小銃を手にしたソ連兵に依頼することにした。銃を構えて大声をあげて近づくソ連兵を見た泥棒は、腰を抜かさんばかりに吃驚仰天し、先ほどどうって変わり叩頭三昧とでも言うのか、床板

に自分の頭を何度も打ち付け血を出し、手を合わせて哀願する様はむしろ哀れを催す。許されたら物を放置し、遁走して行った。

やがて僕らにも別れの日がくることを自覚し、送別の宴を開くことを提案してみた。全員賛成、手分けをして酒係、副食係と決め、上野君と私は酒係となり、日本人酒店に出向くと主人は「どうぞ遠慮無く持つて行って下さい。こちらから行く」と庭に出ます。今、ソ連兵が酒を運んでいますから、気を付けて」と言われる。庭に出ると、幾十となく並んだ大樽から酒が噴出して、広い庭が十センチメートルぐらいの酒のプールになっていた。吹き出す酒を満人が空瓶に受け、ソ連兵がジープに乗せていた。私も早速空瓶を持って噴き出す酒を受け立ち去ろうとしたら、太い手のソ連兵が「ダワイ（よこせ）」と横取りし、空瓶を渡された。今度は気を付けて早く逃げようと思っていたら、また取られてしまい、使役にさせられていた。次に、三分の二ほど瓶に酒が入ったところで白衣の

内側に包み込んで玄関から通り抜けたら、ジープ上の数人の兵から「メデイチンスチュデント？（医学生か？）」と声を掛けられたが、「ダーダー（そうです）」と返事をして出てきた。門外で上野君が不安そうに待っていてくれた。その間の緊張と興奮は絶大だったのだろう。疲労困ぱいし、酒瓶を上野君に渡すことでやっとひと安心し、後ろも振り向かずに二人で自啓寮までとって返した。その夜は、皆で無事別れの祝宴を終了することができた。

翌朝、音もなく進入したソ連兵が戦車の前で「五分以内の全員退去」を命じる。熟睡していたのか、だれも気付く者が無く、橋口寮長は防衛召集まで不在、池田副寮長の機転ある交渉により、やっと十分以内で交渉成立した。かねて、かかることも有らんと準備していた各人の荷物を慌ただしくまとめ、池田先輩の荷物も上野君と引きずりながら坂を下り、本校にたどり着くことができた。市内で行く先の無い者は、中山教授の御好意でお世話

になることになった。私と池田先輩は、上野君の誘いで旅順日満商事支店長さんの家にお世話になることとなり、ひと安心することができた。

市内は、真新しい自転車に乗っていた満人が、ソ連兵からその自転車を強奪された話を初め、破壊と略奪、強姦、発砲、混乱悲哀の中で不安な軍政が敷かれ、やがて日本人居留民たちは、祖父奮戦の聖地、旅順を後にし、植民地五十年の歴史を終焉することとなる。

人々は大八車に荷物を載せて、追われるように街を後にする。中学校寄宿舎で長年奉仕していた満人ワнтаイ老翁が、街の境である白銀山の峠まで送って来て、家財を運ぶ児玉舎監長先生との別れを、いつまでも泣いていたのが心に残る。

私は南満に住む父と妹の安否を気使っていたが、日満商事支店長の佐々木さんの所にソ連軍司令部より軍用炭購入のために、露天堀炭坑の撫順までソ連軍と同行せよ、と命令を受けた。佐々木さんの薦めで、会社員ということにして同行すること

となった。大戦末期に、ソ連軍へ武器援助された米國製トラックである。十台目の最後尾に載せられる。目まぐるしい変化の中の余儀ない即断即決による行動のため、友に知らせる暇もなく、永遠の別れとなったことが悔やまれた。道路いっばいに匂いあふれるアカシアの花散る夕暮れ、ソ連軍トラックの上から旅順と別れを告げる。

金色の金粉を散らして沈む、荘厳な夕日を望む美しい松林が広がる海岸の營城子、旅順の黄金台海岸に昇る旭日天に広がる雄大な朝日、多情多感な日々を過ごした学窓時代、感慨無量の旅順よ、さようなら。金州、湯岳城、僚陽、奉天（瀋陽）等トラックの上で四泊する。途中、コック上がり少尉が「カルトウスキー（馬鈴薯料理のポリシチュウ）を、中国人民家に土足であがり大鍋に作る。おいしかったことと、次に食にありつけるだろうかとの不安から大食いしたら、少尉は「このマリンケ（小さい坊主）俺より食う」と取り巻きの支那人等と共に笑っていた。「マリンケ」で

可愛かったのか、運転手が運転台に載せてくれた。トラックのバウンドで天井に頭を打ちつけるマリンケを、運転のソ連兵は笑っていた。

山坂の悪路を走り、橋のない川を渡り鞍山に入ると、鉄条網に囲まれた中に何万人とも知れぬ武装解除された日本軍の将校や兵隊が動いていた。やがてシベリア送りになった人々であろうか、武器を外された兵隊たちの哀れさは切ない思いであった。

途中停車した折りに、最後尾に商売の支那人二人と乗っていた佐々木さんのもとに行くと、トラックで胴巻きの金を盗まれたと困っていた。当然、同乗の支那人しかいないわけであるが、現場を見ていないため方途が立たなく、悔しい思いである。奉天駅でみんなと離れ、建物の陰で小用を足していると、背丈の大きなソ連監視兵に捕まった。同行のソ連軍将校の説明で納得していったが、日露戦争当時のロシア兵を思わせるような、恐ろしい形相の巨人だった。

ソ連軍将校等五人と日本人二人、中国人の商人の二人は奉天で別れ、三人の将校と日本人二人は馬車で奉天市街を通り抜け不気味な奉天城内も横断して、撫順街道に出る。同行の陽気な大尉は、馬を載せた車や豚を載せた車等を見て「ニエハラシヨウ（良くない）」とやり過ぎ、頻繁に走り行く車の中から待つことしばし。手ごろの大型ジープが来たのを止めて乗り込むと、滅茶苦茶のスピードであつという間に撫順炭坑本社に着いた。天井の高い豪壮なビルの広間で、同行のアレキサンダー中尉は通訳を通して「旅順に来たら尋ねてくれ」と、手を差し伸べてくれた。人間同士の温かい嬉しい触れ合いの一瞬を感じたが、また会うことはあるだろうか。

撫順で日満商事支店長宅で一泊し、お世話になった佐々木さんとは蘇家屯で別れた。一期一会である。もう会えないと思うと、張り裂ける思いである。その後、日本へ引き揚げた御家族の消息をいろいろ探したが、不明であった。

やっと製鉄所のある本溪湖より南にある橋頭に着くと、街はすでに八路軍の治世下であり、倉庫にある食料品の貨車積込みが盛んに行われていた。父や妹も無事で再会を喜んだ。奉天で家族と離ればなれになられていた新京医大の平野博士を、我が家にお連れして来た父が、八路軍の治世下として共生診療所と名付けて二人で開業していたが、医療薬品が払底してきたので、佐賀県出身ブローカーの馬場さんと、戦時中近くにできていた日本軍飛行場の退役陸軍飛行少尉の松村さんとの三人で、新しくできたばかりの宮之原僚陽線を通って、奉天へ薬剤購入に向かうこととなった。

この沿線では、まだ八路軍と中央軍の戦いが始まっていなかった。列車は、はじめ快調に進んでいたが、新線のこととて補強工事が甘いせいか、土手に脱線してしまった。幸い怪我人はなかったが、仕方なく三人で僚陽まで歩くこととなった。遠距離のはずだが、緊張のせいかさほど遠く感じなかった。馬場さんの知り合いで、僚陽の街の元

日本兵のお宅にお世話になる。一夜の思い出話をその人から聞いたが、この方面の日本軍は、終戦と同時に千の峰があると言われる山深く高い千山に立てこもったが、やがて攻めて来た八路军は包圍し攻撃してきた。そのとき、日本の上級將校たちは我が身の保全のため銃砲弾を敵に渡してしまっていたため、全滅の悲劇をみたとのことである。その人は、夜陰に乗じて戦友と共に脱出を試みたが、要所所はかがり火で張り巡らされており、蟻の這い出る隙もなく支那兵の声をそばに聞きながら匍匐して、やっとの思いで包圍網を脱出することができた。しかし、僚陽の街に入ると、八路軍の巡邏隊に捕まってしまった。二人とも牢屋に入れられ、明日は死刑とのこと、窓から見える月も今生の見納めと諦めていると、目の前を過ぎる大佐の軍服を着た中国將校を見た。とっさに「張ではないか」と呼んだら一瞬立ち止まり、立ち去って行ったとのことである。昔、日本軍のボーイとして働いていた張だった。可愛がっていたこと

を覚えていたのだろう。深夜に訪れ、拳銃を渡して「逃げる」と牢屋から出してくれた。もう一人の友も助けてくれと頼んだが、事後責任を恐れてか駄目だった。一人街に出ると、また巡邏に会った。とっさに拳銃を乱射して夢中で走っていると、拳銃を持ったままだった。驚いて川の中に投げ捨てて、日本人住宅街の中に紛れ込むことができたとのことであった。維新の志々のような方であった。

一食一椀の恩義により、翌日早く僚陽の駅に赴くと、切符無しの満人ばかりのもの凄いな数の群衆が、我がちに改札口に迫っている。その中で、数人の少年が我々を日本人と見て「シヨウビーズライ(野郎、こっちへ来い)」といじめようとしていたが、群衆に押されて途絶えてしまった。日本人の我々は当然客車に入らず、手すりを持つというより真冬の手すりは、腕で抱え込むようにしなければ振り落とされてしまう。早い連京線列車での、耳が千切れるような寒風の中で耐えてい

ると、客車内にいた満人の老婆が中に入れてくれた。世がいくら変わっても、変わらぬものは国を超えた人の情けであろうか。着いた奉天の街は終戦の余波を受け、案内された所は汚れた道路端で、泥棒市場のようなありとあらゆるものが乱雑に投げ出され売られていた。その中に、必要な注射液や薬剤をリユックサククいっぱい仕入れ、帰路に就く。幸い安奉鉄路線は正常に機能しており、無事に帰宅することができた。

満州の寒い冬を越して水温むころより、この街にも遠い雷鳴のような大砲の音がだんだん激しく聞かれるようになった。やがて、八路军から在留邦人に対して担架隊使役の割り当てがあった。この街に住む中学生や壮丁、近くにあった元日本軍飛行場の除隊兵たちや鉄道職員が割り当てられ、物陰で見送る父の切なく慈愛に満ちた瞳を、それから幾度も見ることになる。

ひと駅列車で運ばれて宮の原駅に下車し、元日本人旅館に入る。畳ははがれ、窓は壊され、略奪

に遭ったのだろう。柱と床張りだけの二階で、放置されていた板を引いて寝ころび、一夜を過ごす。

翌早朝、即席の木製担架を抱えての出発。畑や川土堤を越えて進む。昼ごろ小休止となる。浅い壕を掘らされ、戦死した二人の八路军を埋葬した。その軍靴の足が哀れな印象として心に焼き付く。

昼食となり、支那鍋と炊き出されたばかりの、熱い赤高粱を鷲づかみにして握り、お採は畑中に植えてある生ネギを引きちぎり、塩辛い支那味噌に浸けての食事である。第一線に近づくと、山頂よりは激しい重機関銃の発射音が響いてくるし、後方からはずしんと胴体に響く野砲の発射音が繰り返される。その中、山より降りてくる担架をのぞくと、人間の片足が載っている。次の担架には片足のない青ざめた兵士が載っている。緑の草いきれのする山頂をそろそろ進むと、炎天下八路军に駆り出されたのだろう。日本人外科医師が、戸板の上に横たわる負傷兵を、血みどろになって手術をしている姿を見た。

我々は、やがて山頂のトーチカ陣地の横に待たされた。元満州軍より八路軍に移った兵士が、人なつこく話しかけてきた。「ニーメンハイバ、マ（君たち怖くないのか）」と。ここで空元氣を出しても始まらないので「ウオハイバ、デブデリヤオ（怖くて堪らない）」と答えたら、笑って「メイハイパーバ（怖くないよ）」と話していた。戦争でなければ、空はあくまでも澄み渡り、春風駘蕩として春霞の山並みは美しいが、現実はかなたの稜線より打ち込まれる砲弾が五十〜百メートルにわたり散乱して着弾し、砲煙が絶え間なく上がっている。以前、中学の教師から「発射された砲弾は、二発目は同じ所に落ちることは無い」と教わったので、砲弾の落ちた所に入って座ろうかと友人と話していたが、次に飛んできた砲弾は全く同じ所に落ちたので、先生の話も当てにならず行かずに命拾いをした。

やがて中央軍の総攻撃であろうか、一段と激しい砲煙弾雨の中、八路軍の負傷兵も増加する。早

速、頭部を負傷した兵士が担がれて来た。「タイジンタイシンクラー（旦那さん、ご苦労さん）」と担架に載せて山頂を下がるころから砲弾機銃の音はさらに激しく、後に残った仲間たちの安否が気遣われたが、不思議と怪我する者はなかったようだ。

高い山頂を背にして駆けるようにして下って行くと、関門で番兵の八路兵から中華蕎麦のスープが振る舞われた。「ゲイウオハイイーベイ（もう一杯欲しい）」と求めたが「ブシン（駄目）」と一杯だけだった。日暮れて、とある石造りの民家で休憩し、今宵はここで泊まるとの八路兵の命令。

こんな所にいて敵が攻めて来たら皆殺しに遭うが、と心配していたら、深夜になって退却移動となる。知らない山々を彷徨し、一緒だった八路兵はどこに行っただのか、居なくなっていた。重い担架を担ぎ疲労困憊いなのと夜の寒さが厳しく、空腹も忘れて黙々と進むが、休憩になると水がぱりぱりの氷の固まりとなっていて小川のそばにごろ

りと朽ち、木のように横になるが寒さのため数分と寝てられない。

空が白みかけたとき、昨夜渡った大子河が蜘蛛の巣の糸のように白く光って見えた。ああ、やつと間違えずに帰り着いたとの安ど感で、疲れた足もやや速くなった。昨日出発した宮の原駅に近づくと、日はすっかり昇っていた。中央軍の攻撃が活発になり、空には米軍支援物資の一つであろうか、コンソリテッド軽爆撃機が飛来して、盛んに機銃を発射していた。空襲の最中、担架の負傷兵を駅の構内に並べて走り去ろうとしていると、巨大な剣付き鉄砲を構えた八路の監視兵が「シャンナルチュ（どこに行くのか）」と、怒鳴る声の恐ろしいこと。とつさに仲間の一人が、あちらにある担架を取りに行くとところだと機転を利かせて説明し、納得させた。一昼夜不眠不休で働いてきたのに、まだ離してくれない。一目散に路上へ駆け出すと、戦闘機が二機急降下してくるのが見えた。舗装された路上で隠れる所もない。近くににあ

ったアンペラ小屋に飛び込み、そばにあった四角い大きな石を頭に載せて飛行機を見てみると、我々の方に向かって来る。ものすごい機銃の音が過ぎ去ってよく見ると、すぐそばが八路軍の高射機関銃陣地だった。これは危険と思ひ、支那人家屋の密集地の裏路地のと真ん中に駆け込んだ。やつとひとごちついて横一列に並んでタバコを一服し、空襲の終わるのを待っていると、爆音が途絶えると共に「ざっく！ ざっく！」という軍靴の音と共に「リーベンレンメイヨウマ（日本人は居らんか?）」と近づいて来る声が聞こえる。だが、間一髪、我々は発見されずに済んだ。確かに足音が消えたことを確かめると共に、全員が一目散にビル街に向かって走り出した。その逃げるとききの怖いこと、怖いこと。後ろから銃で頭を狙われているような恐怖心で、振り返る間もあらばこそ、脱兎のごとく走りに走った。

我々のこうした恐怖感をよそに、この林立するビル街で、日本婦人が中国人野菜売りから平日の

ようにのどかに買物をしている姿である。仲間の一人が、このビル街に知っている家があるからと、大きなビルの一つの戸口にたどり着くと、室内は暖かで家人から「どうぞ、どうぞ、奥へ」と案内されたが、安ど感とそれまでの疲労感がどっと押し寄せ、めまいと共に玄関の土間に崩れるように倒れ、昏々と眠ってしまった。

やがてその眠りを覚めさせたのは、八路軍が退去するときに仕掛けた幹線道路のコンクリート橋の爆破であった。立ち上がって見ていると、また金色の稲妻が走ったと思ったら、今度は電気会社の爆破である。やつと我に返った一行の中の元日本軍の炊事軍曹の田辺さんが、「ここから寺岡さんどうする」と相談されたので、「やはり私は橋頭の街に帰りますよ」と言ったら「私も一緒に連れて行って下さい」と言われた。敗戦という混乱の中では、立派な兵隊さんでも自分の身の処し方に迷うような虚無感に襲われるのだろう。

第二の故郷ともなった橋頭の街へ向かって、二

人は歩き出した。まだ午前中なので日は高く、空は青くさえ渡り、緑の草木が爽やかであった。線路伝いに山道を進んでいると、平行した高い道を八路軍の兵士が何か重い物を荷駄に載せて運んでいる。会うとまた使役に取られてはやばいと、うつむいて黙々と歩いていたが、ちよつと頭を上げたときに、「来い！ 来い！」と手招きされた。百年目である。逃げたら銃で撃ち殺されてしまう。仕方なくそばへ行くと、登り坂の荷駄の後押しである。百キログラム爆弾が二個載っていた。八路軍退却に伴うトンネルか橋梁の爆破用であろうか、峠を越えた所で解放してくれた。何と嬉しかったことか、もうこれで我が家へ帰れる。トンネルを出た所に鉄橋が掛かっている高台から見る橋頭の街は、何年も離れていたような懐かしさで胸いっぱいだった。

坂を駆けるようにして我が家に飛び込むと、父がすぐ隠れると押入に入れようとしたので、そのわけをただすと、八路兵が退去に当たって日本人

狩りをしているとのこと。それは、退却に当たって、旧飛行場に運び込まれるはずの膨大な爆弾が駅の倉庫に置いており、それに火を点けるとのこと。もし実行されれば、日本人家屋はもとより中国家屋も全滅になる。まさに人類存亡のときと自覚し、父の制止も振り切って、いつ爆破するか分からない駅の爆弾倉庫に向かって走る。駅に着くと、日本人も中国人も一緒になって、信管を取った五十キログラム爆弾を崖下に投げ捨てている。数十メートルの崖下には、おびただしい爆弾がマツチの軸棒のように無数の山となり重なっているのが見えた。列に加わり黙々と作業をしていると、すぐそばを高台となっている駅からトロッコを押し、にやにやと笑った数人の八路兵が、坂を風のように下って行った。すると見ている間にだれかが、「八路が火を点けたぞ！」と叫んでいる。まさかと立ち止まり眺めていると、倉庫から突然黒い煙が吹き出してきた。倉庫には、まだ残り三分の一ぐらいの爆弾と信管全部が残っている。私も

大声で「八路が火を点けたぞ！」と叫びながら土手を駆け下り、川縁に伏せたが、紅蓮の炎は広がるだけで爆破はしない。よし、では逃げられる所まで逃げようと橋を渡り、高粱の広がる一本道を橋頭富士に向かって、死を賭けたマラソン競争である。間もなく熱せられたのであろう一発が爆破すると共に、続いて仕掛花火のように「バ、バ、バ、バーン！」と地面を揺るがす大爆発がしばらく続いた。目と耳を塞いで伏せた背中を、台風のような爆風が「ごうごう」と通り過ぎていった。不気味な静寂が訪れた。以前手足が爆弾などでもぎ取られるときは、痛みを感じないと聞いたことがある。蛙のように、右足を動かしてみた。動く。左足を動かしてみた。何ともないようだ。次に左手、右手と動かしてみたが五体無事のように。と共に、ぱちぱち弾けるような音が聞こえてきた。ゆっくりと身体をねじり起こし振り返ってみると、まるで背中に覆い被さるように爆発の黒煙が何百メートルに及ぶのだろうか、大木のように天に柱

していた。隣の宮之原の住人たちは、橋頭の街は全滅したのだろうかとうわさをしていたとか。火薬庫は次々と燃え、街も飛び散った爆弾で各所で炎上していた。

だれ言うとも無く、助かった人たちは河原に集まって来た。爆発の物凄さと、街の燃え上がる凄まじさに茫然自失した人たちで人垣ができた。逃げ遅れて河原の土手に伏せた人が、爆発と同時に「ぼたぼた」という音に目を開けてみると、真つ赤に焼けて剃刀のように切り立った破片が、土中に深く刺さってゆく。「今死ぬか、今死ぬか、と何度思ったことか」と語り合っていた。やっと我に返り、我が家はどうなっただろうと叫んでみたら、皆一斉に駆け出した。走って行く途中、数十軒の街路の民家が一斉に火を吹いている。下層は白熱光、中層は黄色光、上層は赤黒い黒煙の旋風を起こして燃え上がり、さながら京都の応仁の乱における火災の屏風絵のようである。中国人農家の黒豚が何十頭と出て来て、我々と共に走ってい

る。たどり着いた我が家は幸いに立っていたが、厚い玄関扉はうち割れ、窓ガラスは粉々に飛び散り、天井裏ははげ落ち真つ黒な塵が積もっている。隠れていた妹は、顔をあげた瞬間の爆発とかで煤けた顔に傷を負っており、哀れだった。駅近くに住む人たちは、爆風のためか外傷を認めないで死亡していたと聞く。

やがて火災の収まるころ、東側のこの街を取り囲む約百三十メートルの高さの大潮山の山並みから、カーキ色の軍服姿の兵隊が見えてきた。日本軍かと錯覚したが、中央軍だった。そばの松山に布陣する八路軍との間で、住宅街越しの銃砲弾の撃ち合いが続いたが、間もなく八路軍は一本松の山の方へ退却して行った。中央軍の尖兵として初めに進駐して来た、明るく親日的な大柄の兵士は、一週間後に八路軍の便衣隊に暗殺されて、道路端に冷たい骸となって死んでいた。哀れな戦場の一齣である。

退却する八路軍を追う中央軍の使役として、再

び日本人居留地への要請を受けて、我々は再び内乱の戦場に赴く。今度は、蒋介石側の中央軍の使役である。対峙する山頂に向かうと、地雷を踏んだ中央軍の兵士が飛び出した大腸が炎元下で数倍に膨張し、白眼をむいて絶命している。付いて来た兵士が死体の内臓を触っている。手帳でも探しているのかなと見ていると、財布を取り出し中の千円の軍票を抜いてから、財布は捨てた。さらに、持っていた新品の軍靴もいたっていたのには、奇妙な思いを覚えた。緑の草には、点々と赤い血潮が落ちている。道を離れて断崖の坂に倒れている兵士を運び込もうとしていたら、五十センチメートルと離れぬ所に無数に円盤の地雷が散らばっていた。際どい所を注意されて離れて進む。やがて二百メートルほど離れた溪谷を挟んで、八路軍と対峙した所で塹壕を掘っていると、突然松の葉っぱを掠めたような音を聞く。将校から厳しく注意を受けて指さす方を見ると、八路兵が銃を構えて私を狙っていた。驚いて、身体を屈めて塹壕を

掘ることにした。夜が更けるまで、山の斜面で汚れた麻袋二枚ずつ渡されかぶって休んでいると、寒い夜空の下、綺麗な星が無数にさえている。「この星は日本に続いているのに？」と考える。昔中学の先生から習った「二千里外故人の心」（今は無き懐かしい人の意味）を思い出しながら。すると突然、三方面から激しい銃砲弾の音がして、囲まれたような錯覚に陥る。慣れた除隊兵たちは立ち上がり、駆けて音のしない方へ駆け下って行く。それについて駆けて行くと途中で、駅の助役さんが「山の泉にはまった」と、寒い夜空の中で震えていた。肺炎にでもならなければ良いと思ったが、その後の消息は聞かない。一方面から攻めて来た八路兵が、二方面の中央軍のトーチカとの戦闘のようだった。

朝方になると、中央軍の方が武器が優勢で、盛んに砲撃を繰り返している。暖かくなった午前のこととて、安心して岩の斜面でうたた寝をしていると、連れの友人たちが騒いでいるので尋ねると

「貴方は寝ていて良かったですよ。二メートルのそばに追撃砲の弾が炸裂したのですよ。立っていたら大変なことになるところだった」と説明されたが、激しい戦闘の合間では、他人事のようにしか思われないほど神経が麻痺していたのだろう。そして、そんなに心の負担とはならなかった。

山の尾根伝いに重い負傷兵を運ばされ下って来ると、湿地帯に差し掛かる。赤や青、紫の綺麗で可憐なスイトピーのような草花が無数に咲いている。山深いこんな谷間にも美しい花が咲いていたことが、今も懐かしく思い出されてくる。そして、激しく苦しかった過去を忘れさせてくれた。

間もなく八路军が破壊して去った後に落ちた鉄橋の修復工事が始まり、再び居留民たちも駆り出される。夜明けより日暮れまで、終日墜ちた鉄橋の上に枕木を格子状に積み上げて線路を載せる作業である。大陸の枕木は、日本の新幹線の枕木のごとく大きく、二人で担ぐと腰がぐらつく。一日の作業が終わるころには、身体のみ弱な中学生は、

疲れのため服を着たまま川の中に浸かって身体を癒していた。数十メートルもある鉄橋も、日本人多数の連日の使役により、旬日を出でずして完成し、列車の開通となった。

高い鉄橋の修復が完成すると、間もなく引揚げが始まる。昭和二十一年七月ごろ、旧日本軍飛行場責任者の中尉殿の指揮で、橋頭地区の住民は隣の宮之原町の駅前を集められ、中国人に荷物の点検を受ける。私のたった一つのリュックサックの半分は医学書だったが、乗車前にみんな取られてしまい荷物は半分になった。何か騒がしいと思ったら、植村街長（町長）さん、和田在郷軍人会長、警察官の渡部さん、成田さんと飛行場責任者中尉殿が引揚げ列車から降ろされてしまった。その後の行方は分からない。

後の指揮者は日本人にはもちろんのこと、満人にも広く人望のあった大坪小学校校長先生にお鉢が回ってきたが、体力が持たないとて辞退され、医療班長の父に引揚げ大隊長の責任が回ってきた。

住み慣れた南満の山々、楽しかった幼いころの川遊びの思い出も遠く、異境における日本の敗戦と中国人同士の内乱に酷使された悲劇と、亡き母の悲しい記憶を残して。遂に列車は宮之原駅を離れる。

引揚げ列車は新しくできた遼陽宮之原線を通じて連京線に入り南下する。私も医療班員として皆さんのお手伝いをする事になった。錦州で下車し収容施設で葫蘆島乗船前の一週間ほどを過ごす。引揚船は米軍の大型上陸用舟艇で、船では我々に比べ色の白い日本人船員が明るく働いていた。やっと日本に帰れる、銀飯もたらふく食べられる。今まで死を背にしていた緊張感が取れて、人間的感覚が戻ってくるようだった。荒い玄界灘を渡るころ、青白く引きつった顔の父親らしい人が、ようやく乗船できたのに船中で息絶えて水葬される我が子に祈りを捧げる姿が哀しく心に残る。

穏やかな海に、山青く水清き美しい日本の島々が近づいてきた。昭和二十一年八月博多湾に入港

し、検疫を受ける。明日はみんなとお別れということ、甲板でパーティーが開かれた。もうこれで苦楽を共にした人とも別れ別れになるのである。

人々の思い思いのショーが行われる。私もサーチライトで眩しい舞台上上がり、ハーモニカで心を込めて「花摘む野辺に」を演奏した。万雷の拍手を浴び、父には巧いじゃないかと褒められた。

大東亜戦争で敗れた後、異国で棄民となり内乱の使役に駆り出される。もし死んだら祖国への戦死ではなく、全くの犬死にである。やっと、人権を認められる日本にたどり着いた。

父が戦前より送金し、よく面倒を見ていた熊本の小天の知人宅へひとまず落ち着いた。そこは蜜柑山で、食糧代わりに蜜柑やネーブルなどの柑橘類をよく食べた。父は、同業の北田さんの一刻も早くとの勧めで、玉名町に借家を借りて歯科医院を開業し、やっと生計を得ることができた。子供たちも町工場や鉱山にアルバイトに行き、生計を支えた。

その後、友人等とも連絡が取れ、それぞれに転校、復学ができ、今日の日を迎えることができた。厳しい戦後の体験は不動心を養えたと共に、平和、不戦への願いを新たにするものであります。

「思いでは雲に似てうたかたの夢と過ぎ去る」
戦後六十五年も過ぎると、印象的な出来事その他は忘却のかなたに失せてしまい、この「平和の礎」を執筆するに際して妹と長距離電話で話し合い、やっと当時のことを関係づけることができた。

幼い僕の敗戦見聞録

石川県 新矢 誠 二

はじめに

平成五（一九九三）年、僕が五十七歳になった年に、母が介護施設に入った。無口な母の寂しさを少しでも紛らわすことと、ぼけ防止の両方の効果を期待し、かつ僕自身の自分史作成のための裏付けを母から得ることも狙いとして週二回、見舞いの言葉を添えて満州時代からの思い出を語る形式の葉書を出すこととした。それは僕自身に対する義務として課し、約二年と少しの間続いた。

それには、母を引きとって世話をすることができない親不孝を詫げる気持ちも含んでいた。この度、この葉書文を再編集して「平和の礎」に寄稿することにした。母は平成七年の秋に八十六歳の天寿を全うしたが、このことをきくと喜んでくれるものと思ひ、供養のつもりもあった。